1. Dee: みなさんこんにちは。私はディアンドレ・トンプソンと申します。

Hat: 私はハティー・ガードナーと申します。

Dee: 私達は外国語教育とインターカルチュラリティ、「異文化相互理解」：日米比較研究についての研究の結果についてお話致します。

1. Dee: これがこの発表の概要です。
2. Dee: なぜこの研究をしたかですが、それは、わたしたちがサービスラーニングの授業を受けた際、多文化の人々を結びつけ、平等さと公平性を大事にしなければいけないことを学びました。

Hat: また、インターカルチュラリティが留学したにとても重要であり、日本とアメリカでの外国語教育ではその能力をつけるためにどのような教育をしているのかをもっと知りたいと思ったからです。また、私たちは、言語教育にわりたいのでこの研究の結果をまえていい先生になりたいからです。

1. Hat: これが、私たちの研究質問です。
	1. 一、自分が受けた外国語教育をどのように思っているか。
	2. 二、外国語は、異文化に対する知識をどのようにめるのか。
	3. 三、外国語教育は学生と多文化社会をげるためにどのようなをたしているのか。
2. Dee: まず初めに、この研究の背景についてこの順序でお話いたします。

Hat: -----------------------------------

1. まず初めにアメリカでの外国語ののについてです。外国語教育に関してはによってなりどのぐらいしなければならないというはありませんが大学に入学するため一般的に高校での二年のが必要です。
2. 日本の場合は今までは中学校三年、高校三年、そして、大学で一年から二年と少なくても六年から八年間は英語を勉強します。
3. しかし、グローバル社会にできるを作るため日本では小学校からの英語のをしています。早い所は小学校三年生から始めます。
4. しかし、英語教育は大学に入るための入試試験にされるため、に使える英語教育とはことなるのがです。

Dee: --------------------------------------

1. ではここでどのぐらいの学生が海外留学するのでしょうか。この図に示されているように2013年から2014年にかけて5%留学する数が増えています。
2. 日本の場合は2004年から徐々に海外留学する学生の数が減ってきています。その理由には経済不況などがあげられますが国ではグロバール人材を増やすために2020年まで留学生を12万にまで増やす予定です。

Hat: --------------------------------

1. では、アメリカでは外国語教育はどのようにわれているのでしょうか。この図にあるように大きく二つに分けることができます。オポチュニスト時代とディスミッシブ時代に分けられます。オポチュニスト時代は言語は世界でできる大事な能力として見られていましたが、1980年代からのディスミッシブ時代には外国語教育はあまりされなくなりました。しかし、、び外国語教育の重要性がされてきています。
	1. それは、異文化に対するとインターカルチュラリティの、世界でのでのちき、国の安全のためととする能力にするからです。
2. 日本では1964年の東京オリンピックをに使える言語が必要だというが高まりました。つまり、今までの授業ではコミュニケーションの力がわれないことが明らかになりました。
3. そのため、1970年代からコミュニカティブ・アプローチがされるようになりました。
4. また英語を話す母国語話者を学校の授業に来てもらうため、1989年にはJET プログラムをしコミュニケーション能力を高め外国語教育のとののをるに力をいれるようになりました。
5. また、英語のクラスは英語でうべきだという考えが広まる一方、そのにはのもわってくるため難しくがられています。
6. 2014年には小学校から英語を教えることがされています。

Dee: -------------------------------------

1. これはアメリカの外国語教授法の編成を表したものです。アメリカも1800年代をみてみると文法翻訳中心の教授法でしたが、１９８６年にACTFLのプロフィシェンシーガイドラインが全米に普及して以来実生活で対話ができる能力、そしてグローバス社会での異文化で柔軟に対応できる人材の養成に力をいれるようになりました。
2. また、アドバンスド ・プレイスメントテストはナシュナルスタンダーズが基本となっており、アメリカでの外国語教育ではなま教材が使われることが重要視されるようになりました。
3. 日本の場合アメリカと同じようにコミュニケーションが重要だとし様々な計画を立ています。
4. しかし、やはり日本では外国語教育が大学入試が目的となっているためテスト内容が読み、書き、聞く、話すの四技能に集中されています。そのためコミュニケーション中心の内容に切り替えることは難しいようです。

Dee: ----------------------------------------------

1. アメリカで使われているのがWorld Readiness Standardsで1996年のNational StandardsにCommon Coreや２１世紀のスキル等を取り入れ、このグローバル化した社会で通じる言語教育をめざしたものです。
2. このようにコミュニケーション、文化、コネクション、比較、コミュニティーの５つの分野に繋がりをもたせながら行うように奨励しています。
3. 日本の場合は文部科学省のアクションプラン「戦略構想」基づいて経済・社会等のグローバル化が進展する中、子ども達が２１世紀を生き抜くためには、国際的共通語となっている「英語」のコミュニケーション能力を身に付け ることが必要であるという理念の基に読む・書く・聞く ・ 話すの４技能を伸ばすようにガイドラインが作られています。

Dee: ------------------------------------

1. ここでモチベーションについてみてみましょう。言語を習得する上では動機がとても重要です。動機には外因性と内因性の２つがあります。どちらの動機も大事ですが、内因性の動機が特に言語習得には大事なようです。
2. また言語習得には学習者にとってどのくらい不安度が高くなるかで左右されます。例えばあまりにも話す時に不安度が高くなると普段の実力がでないこともよくあります。不安に関してはコミュニケーションをとる際に生じる不安、テストを受ける際に生じる不安、それから評価を受ける際に生じる不安があります。ある程度の不安を感じるのは言語教育には大事ですが、ありすぎても習得が妨げられます。
3. これはアメリカの学生と日本の学生が不安を感じる状況についてまとめた物です。アメリカでは発音を間違える時、人前で発表する時などが挙げています。日本では文化の違いにより生じる誤解、試験等で良い成績をとらなければいけないというプレッシャーや人前で間違えること等を気にして不安になること等があげられています。

Hat: ------------------------------------

1. ここで言語に大事な物としてがあてられているのがインターカルチュラリティです。これは、異文化をおいにめあいその文化にあったをつかうことです。
2. インターカルチュラリティは言語能力が高くなるにいその国の文化にしてくるため母国語話者のようにその国の文化にあったができるようになるのです。になるにい言語と文化のギャップが少なくなります。
3. インターカルチュアリテーを外国語ので学べると一番いいのですが、やはりには留学をしてその国ですることでその力がつきます。しかし授業でもペンパルとのなどはでのをえたをみ入れていくことが大事です。

-----------------------------------------

1. Hat: それではここで研究の結果についてお話しいたします。は日本人３４、アメリカ人30の64でアンケート調査をオンラインでいました。
2. Hat: では研究質問１の外国語教育について大学生はどのような経験があるのかについての結果です。
3. Dee: 自分達がうけた外国語教育に関しては約90％のアメリカの学生と65％の日本の学生が外国語教育に対して肯定的な経験を持っていたのに対し、３割以上の日本の学生が外国語教育に対して否定的な意見を持っていたことがわかりました。
4. Hat: なとしてアメリカの学生は外国語の先生が楽しく教えてくれるのであまりクラスでプレッシャーを感じない。をするのが楽しかったと答えていました。良い経験をしなかった理由にはスペイン語を学んだの二年間、私の先生は、私と同じくスペイン語をあまりしていなかったので、がまらなかったと言っています。
5. Dee: 肯定的な意見としては日本人の学生は大学での英語の授業は会話もするので、おもしろかったと答えていました。良い経験をしなかった理由には文法中心で一方的な授業だったので退屈だったとある女性の学生が答えています。
6. Hat: な評価に対する先生への不安に関してはほとんどの日米の学生は、先生にいをされることに対しては不安に思っていません。
7. Dee: いつも他の学生の方が優れているのではないかという不安に対しては約70％のアメリカ人の学生が他の学生の方が自分より優れていると思っているのに対し、約６０％の日本人の学生は優れていないと回答しました。
8. Hat: でいいを取るため、プレッシャーを感じるかというにはアメリカ人の学生の方が、日本の学生よりプレッシャーを感じるようです。
9. Dee: 授業中に準備しないをで話さなければいけない時、うろたえてしまうという不安度はどちらの学生も不安度が高いです。
10. Hat: では外国語の授業でどのぐらいとつなげたプロジェクトなどをしたことがあるかという質問にはどちらの学生もボランティア・サービスラーニング、ペンパル、海外とののプロジェクトにしたことがあると答えました。
11. Dee: それではここで研究１の質問のまとめをしたいと思います。アメリカの学生の方が日本の学生より外国語の授業では肯定的な経験を持っていることがわかりました。その理由として先生が良かったから、授業で会話ができたから等の理由をあげています。否定的な理由としては、日本の場合、書く・読む・聞くに焦点がおかれ話す力が伸びないこと等があげられました。

Hat: また不安度に関しては外国語の授業ではアメリカ人の方が日本人よりクラスメートと自分をしたり、テストへの不安があります。いたことは、日本人もアメリカ人も外国語の授業にはとつながったプロジェクトを取り入れていたと答えたことです。

1. Dee: では研究質問2 の、外国語は異文化に対する知識をどのように深めるのかについての結果を話します。
2. Hat: 今まであなたの国で取った外国語のクラスの中で、も高いレベルはアメリカ人のはレベルの授業を取っていた一方、日本人のはレベルの授業を取っていました。
3. Dee: ではこれから外国語の プロフィシェンシーに関しての質問の結果です。質問の難易度は初級から上級までアクトフルのプロフィシェンシーガイドラインと基にした「自己能力評価」をしてもらいました。

Hat: また言語教育のにおいて、やごとのの、やによる評価のために使うチェックリスト、タスクに使われているとの をしました。

1. Dee: 外国語能力の自己評価に関してはアメリカ人も日本人も自己能力評価に関しては全体的にみて初級の下から中級の下が多いという同じようなレベルに自己評価しました。
2. Hat: ではここでインターカルチュラリティに関する結果について話します。ここではレベルのタスクにづいてデータをしました。
3. Dee: ではその国の文化に即して招待を受けたり断ったりできるかに関してはアメリカの学生は日本の学生に比べて外国語で招待を受けたり断ったりする事に自信を持っているようです。
4. Hat: ではその国の文化にした方法でりをあげたり、受け取ることができるかという点に関しては日本人よりアメリカ人の方が、外国語をいてりをあげたり受け取ったりする事にを持っています。
5. Dee: では会話をする際その国に即したボディーランゲージを使ったり、うまく話のやりとりをしたり、会話をさえぎったり、同意したりすることができるでしょうか。これに関しては日本人よりアメリカ人の方が、自身を持っています。
6. Hat: かがくしゃみをした時、をする時、また、めてくれた時など、その国の文化にした方法ですることができるかについては日本人よりアメリカ人の方が、くできるというを持っています。
7. Hat: ここで研究質問2をまとめます。日本人の学生の方がレベルまでの授業を取っているのに比べ、アメリカ人の学生のはレベルの授業までしか取っていませんが外国語の能力のは同じレベルになったことはい結果でした。つまりアメリカ人の学生と日本人の学生の「話す」能力はたようなレベルに評価されたのは日本の外国語の授業はまだコミュニケーションをしたは取り入れていないというリサーチをけています。私たちが調査をしてたことは、インターカルチュラリティにおいてを持っている日本人が少ないということであり、これが実際の社会でに外国語をいる事が難しいことをしています。
8. Dee: では研究質問3 の外国語は学生と多文化社会を繋げるためにどのような役割を果たしているのかの結果です。
9. Hat: 約70%のアメリカ人は外国語教育によって多文化コミュニティとつながりを持つことができたとしたのに対し、約50%の日本人はしないとしました。
10. Dee: 60%のアメリカ人の大学生と59%の日本人の大学生は学んでいる言語の母語話者との関係を築くことができると同意した。しかし、アメリカ人の大学生の方が日本人の大学生より非常に同意すると回答した割合が多かったです。
11. Hat: 93%のアメリカ人は、外国語教育が他の文化をよりくするのにつとした。一方、68%の日本人も同じようにしました。
12. Dee: ここで研究質問3をまとめます。大半のアメリカ人は外国語教育を通して多文化社会とつながりを持てたと認める一方、日本人の意見はほぼ二分化されました。
一般的に、日米の学生が感じたことは、彼らが母語話者と同程度の関係を構築できたということであり、アメリカ人はそれをより強く感じていました。
Hat: おそらくこのことは、外国語がのを広げるとともに、調査のとした学生がしてな留学を持つ大学にっているからだとされます。
日米の学生は外国語教育のおかげで、より他の文化をし、受け入れるようになったことにするのに対し、7%のアメリカ人と32%の日本人がこれにしています。このことは、アメリカでの外国語の授業におけると他の文化へのをしている所にるのかもしれません。
13. Dee: アメリカ人の方が日本人よりインターカルチュラリティに高い自信を示すのは、熱意のある教師や、対話と他文化理解を重視すること、対象言語の話者と多文化社会との強いつながりがあるからだと考えられます。また必ずしも外国語を使う不安が、外国語教育に伴う学生の良い経験、もしくは悪い経験を左右するというわけではありません。むしろ、教師と授業内容が決定要因となっています。
Hat: 日本人はアメリカ人に比べて多文化社会とのつながりがいと感じていますが、日本人がアメリカ人と比べであり、多文化社会にするが少なくの多文化社会に関してプロジェクトのにがらないがあると考えています。
したがって、授業をした多文化かつ多言語社会とのを持つをみし、に言語がいられている社会で使うをすることによって、授業での経験がよりなものとなり、インターカルチュラリティがすと思います。
14. Dee: この研究の限界点は参加者がカリフォルニアからであること、また大半の日本人はアメリカに留学中の学生や、私たちが日本に留学中に出来た友人であるため、この結果は一般化出来ないことです。
15. Hat: 、大学と、高校でのをわけて調査してみたいです。そうすることによりそれぞれのレベルでどのようにインターカルチュラリティをするかそのがにわかると思います。
16. (61)(62)Dee: 調査の文献
17. (63) Hat: 最後に、ごくださった先生方とえて下さった家族やのさまにをいたします。ごありがとうございました。